後撰百人一首評釋（續）

禾の舍あるじ

兼好法師

手枕の野への草はの霜かれに身はならはしの風の寒けさ

手枕の野といふハ、大和の名所なり、小野家集に、手枕のすき間の風もつらかりき身はならはしの物にぞありける、とよめるをとりて、旅寢をよみ玄なり、霜がれ時に、旅寢すればの意なるを、上の手枕の野の詞にもたせて、こゝにはぶきしなり、下の句ハ、身はならはしといふものゝ、風の寒けさよとの意なり、野中の旅の寒さをつよくいはんとてなるべけれども、小町の歌に下ること數等、

藤原秀能

夕月夜汐みち來らしなには江のあしのわか葉をこゆる白波

くらしは、俗にうつせば、來ルソウニといふことなり、はきとみえぬなり、只白波のたつにて、されもはるゝなり、夕月夜のけしきなり、夕月夜と白波と相映して、趣隱約の間にあり、

宮内卿永範

くもりなき鏡の山の月をみて明けき世をそらに知るかな

鏡の山は、近江の名所なり、聖德を鏡の山の月にたとへて、仰き奉るなり、そらは月をうけ、明き世は、くもりなきかゝみをうく、上句は譬、下句は實、そらの詞、力あり、

衣笠内大臣

白波のかけても人に契りきやこと浦にのみみるめかれとは

是は、戀の歌なり、契きやは、契りはせぬとの反語なり、やは、切るゝ詞の下にれく詞なり、故に契りしやとはいはぬなり、心えおくべし、こと浦は、よその浦なり、みるめかれとは、海松和布刈れなり、これに、見る目離れの意をかけたるなり、人目も草もかれぬとおもへばのかれと同し、先きにあひし時、よその浦にのみ、海人のみるめかるごとく、見る目離れとは、白波のごとく、末かけて、その人に契きりはせざりきとなり、白波、こと浦、みるめかれ、一首の呼應なり、結びのはもじ、必逢はんといふ心にわけたるなり、心つくべし、

前中納言爲相

玉藻刈るかたやいづくそ霞たつあさかの浦の春のあけはの

玉は、藻を美めたるなり、淺香の浦は、津の國の名所なり、霞たつ、一首の骨子なり、意は明なり、玉藻の上に、海人のといふ詞を加へて見るべし、風調雋永、百たび吟ずともあかじ、

津守國冬

郭公忍ふのみだれ限りありてなくやさつきの衣手のもり

郭公の四月になくを、忍び音といふ、衣手の森は、山城の名所なり、郭公もなく時節に限りありて、今は忍ぶ音をたてゝ、みだれ鳴くにやあらん、さ月の衣手の森に、と

の意なり、春日野の若紫のすり衣、忘のぶのみだれ限忘られずといふを本歌にとりなしてよめるなり、衣に忘のぶずりといふがあれば、衣手の森をいだしたるなり、みだれなくといふべきを、本歌によりて、詞を割きて用ひたり、本歌の取樣、上下の照應、味ふべし、

後照念院關白太政大臣

包みえぬ涙なりけり郭公聲を忘のふのもりの下露

忘のぶの森は、陸奥の名所なり、忘のぶの森の下露は、郭公の忘のぶ音になきて、つつみえぬ涙なりけりといふを、忘のぶの森にかけたるなり、涙なるらんといひたし、

安嘉門院四條

庵しめて住むとは人にみえすとも心のうちの山かけもかな

山陰に庵しめての意なり、下に山かげをまはして、それにて見せたるなり、この歌は、前の平泰時が歌と、同意なり、心のうちの山とハ、いかゞにや、心のうちにとあらまはしたとひ山陰に、住家はなくとも、心の中に山陰はあれとの意なるべきをや、

藤原資隆朝臣

時雨かときけは木の葉のふるものをそれにもぬるゝ我か袂かな

一首の意、解をまたざるべし、木の葉の雨にも、袖をぬらす、何等の哀婉、それにものの詞、筆力扛鼎ともいふべきにや、

冷泉前太政大臣

池水にますみのかゝみ影そへてちりもくもらぬ秋の夜のつき

ますみの鏡とは、すみきつたる鏡といふことなり、また、美稱なり、これは月をたとへしなり、池水もすみわたれるゆゑに、影そへてといふなり、かゞみといふゆゑに、ちりもとうけたり、ちりはどものの心なり、一筆清空、一點のちりもなき歌なり、

源雅光

世とともに戀ひわたれともあまの川あふせは雲のよそにこそあれ

世は、悠遠なるものゆゑ、世とともにといふなり、川の水は、瀬のある所にて、あるは別れ、あるは逢ふものゆゑ、またもあふせなど、たとへていへること、常なり、こそあれは、あふせは、よそにこそあれども、こゝに戀ふる人にあらずとの心なり、わたる、あふせ、雲、みな天の川の縁なり、

前左兵衛督敎定

うつゝには語るたよりもなかりけり心のうちをゆめにみせはや

うつゝは、現在まつあたりなり、ゆめには、ゆめになりともの心なり、忠臣の讒臣にあひて、上天闕を叩きて孤忠をあらはさんと欲すとも、よしなき時など、必この情懷はあるべし、うつゝにゆめ、ろたるにみする、兩々反映せり、

平賴泰

來ぬまても待つはたのみのあるものをうたてあけゆく鳥の聲かな

とひくべき人の鳥のなくまで、來たらねば、終にこぬに極まりたることなれば、かくはいへるなり、初句のもじ、心えがたし、はもじにてあるべし、知巳のこんを一夜まち困うじたる時など、誰もこの心ばねあるべし、

大江茂重

橋立や松吹きわたる浦風に入海とはくすめる月かけ

橋立は、丹後の天の橋立なり、吹渡る、すめる、にて、雲の風にふかれて、はれたるけしきみせたり、

藤原業清

たれとなき宿の夕を契にてかはるあるしを幾夜とふらん

たれとなきは、誰と定めたることなきなり、これは長旅の心をよめるなり、むかし東海道五十三次の宿々をすぎて、江戸に下るには、一日に十里づゝありくとすとも、十二日の間、毎夕契りたきたるごとく、宿りて、十二人のかはりたるあるじをとふことなり、その間の旅境、愁境、苦境、勞境、いかばかりぞや、これをこと〴〵くいひ盡したるが、この歌の妙處なり、その尤妙なる處は、夕を契りにて、といふにやあらん、客中無聊の情態、寫しえて眼前にあり、これを、誰となきやとのあるじを契にて幾夜ゝかはる宿をとふらんといはゞ、すなはち庸筆、これにて、この巧拙を去りぬべし、